

役所預としてはしいとの請願の取次ぎを求めている。また、翌十四年(一八四三)二月に正鐵は遠島の申渡しを受けたが、避難先の宮津から江戸に戻ろうとした野澤鐵教は白川家に参殿して妻の女通行手形の発給を申請し、数日で京都所司代から下付されるといふ素早い対応がなされた。また、弘化四年(一八四七)には刀鍛冶の莊司直胤や加藤鐵秀が許状を受けているが、同年正月の東叡山役所への赦免の請願と関係があらう。

嘉永二年(一八四九)の正鐵死去後の数年間は活動の形跡がないが、五年後の安政元年(一八五四)頃には三浦知善により復興され、白川家との関係は、まず岡山藩から取締を受けた伊藤祐像門下の岡山の門中により再開された。安政四年(一八五七)三月に伊藤門下の佐々木、矢部、中山の三人が「神道講釈下知状」を受け、伊藤は安政五年(一八五八)八月に摂津、和泉での布教後に参殿し、資敬王への御前講釈を行った。さらに、中山が江戸に向ったので、江戸の門中も勢いづいて、安政六年(一八五九)には梅田神明宮の後継者杉山鞠負と正鐵の妻男也が上京し、伯王に面会の上、内侍所に参拝した。

文久二年(一八六二)の取締後には、所払に処せられた坂田鐵安や村越守一が白川家に接近して家来の身分を得た。文久三年から慶応二年には、坂田、村越、伊藤らは白川家縁故の一条通新町西入る真如堂町の借家を活用しながら、毎年江戸、京都、信州を往来して伝道拠点を開き、「遠州長上郡」「美濃国武儀郡」など活動が現存する場所もある。

慶応四年(一八六八)二月付で、井上正鐵が「禊祓靈社」の神号により奉遷されたが、この年の五月と六月に入門の記録が

あり、多くの礼金が納められているので、この手続きの関係であらう。明治二年(一八六九)二月には赦免が伝達され、東京に転居した白川家に見舞と赦免のお礼として三月二十日に門中の主だったものたちが参館した。その後も、坂田と伊藤らは、しばしば手土産を持参して参殿しているが、四年(一八七一)五月の神官職員規則により、白川家と井上門中との公式な関係は終了した。

パネルの主旨とまとめ

山口 剛史

本パネルでは、神祇伯白川家と伯家神道について、その実態に迫るため、金光英子氏・石川達也氏・山口剛史・荻原稔氏が、それぞれの立場と視座から各自の研究成果を発表した。コメンテータは幡鎌一弘氏、司会は井上智勝氏に依頼した。両氏は、いずれも当該分野の代表的な研究者であり、近世の宗教史における白川家の果たした役割はもちろんのこと、対抗勢力である吉田家、朝廷・幕府といった世俗権威との関連など、幅広い視野で研究を展開してこられた。本パネルは、両氏のご教示無くして成立し得るものではなかった。その点を冒頭に明記し、まずは、この場をお借りして感謝申し上げたい。そして、フロアからは松本久史氏・三ツ松誠氏が発言され、有意義な議論となったことにお礼申し上げる。

本パネルにおける各発表は、金光氏が総論、石川氏が概論、山口・荻原氏が各論、と位置づけることが出来る。白川家は、吉田家に比して、従来顧みられることが少なかった。本パネル

の目的の一つは、白川家が近世神社制度において占めていた位置を解き明かすことであった。また、白川家が位階の執奏や祭神の勧遷、伯家神道の伝授を、全国の門人に対してどのような行っていたのか、その実態も明らかにしたかった。なぜなら、こうした事柄は、神社を中心とする各地域社会と中央(白川家)との関係を検証することでもあり、ひいては、両者の交渉が地域文化の発展に与えた影響を考察することにもなるからである。

金光氏は、「諸国門人帳」や「諸国勧遷留」、「諸国執奏留」といった「白川家資料」を所蔵される金光図書館の館長であり、父上眞整氏や兄上和道氏(同館前館長)同様、「白川家資料」研究のパイオニアとも言える存在である。今回は、「諸国門人帳」の分析を中心に発表された。金光教祖金光大神の白川家入門の実際についての解説もあった。また、酒折宮(現在の岡山神社)についての興味深い事例紹介があり、今後更なる研究が期待される。

石川氏は、金光図書館蔵白川家資料と、関東地方(埼玉県・群馬県・神奈川県)の地域資料とを組み合わせることで、白川家による社祠勧遷や門人支配について立体的に分析された。幡鎌氏と井上氏から、今後の研究を深化させるための貴重な助言があった。加えて、榎本直樹氏の先行研究との関連性も話題となった。そうしたことも含めて、今後は、関東地方のみならず、全国規模で地域資料と照らし合わせる作業も必要となっていく。

山口は、白川家門人の国学者斎藤彦磨と伯家鎮魂祭について

で、彼の遺した資料から考察を加えた。山口は、鎮魂祭を中心に神祇伯白川家及び伯家神道の研究を継続してきたが、本発表では、彦磨が鎮魂祭をどのように捉えていたのかを検討した。そして、彼が実際に修した祭祀について、具体的に紹介した。今後は、彦磨の鎮魂観や、彦磨の門人戸澤正令(出羽国新庄藩主)と鎮魂祭についても研究を進め、その様相を明らかにしていきたい。

萩原氏は、近世末期の白川家と初期禊教との関係を論じられた。後の教派神道としての禊教に、白川家がどのような影響を与えたのかを詳細に検証され、いわゆる民衆宗教の活動が社会的な地位を獲得するまでの経緯を考察された。白川家に所属して活動を合法化しようとした人々と、それを支援した白川家の動きに着目された。また、岡山の門中や丹後国宮津藩主本庄家についても言及され、金光氏・幡鎌氏との間で有益な意見交換があった。

幡鎌氏は、同氏論考「徳川時代後期の神道と白川家」を基に、専門的な見地からコメントされた。白川家は、当時の都市社会の発達を基盤として、都市民の支持を受けた宗教者を内部に取り込み、多様な宗教運動を貪欲に内包して、都市社会の持っていた機能を最大限に利用して発展したことを指摘された。入門の垣根を低くして、門人を幅広く吸収した結果、組織の整備が求められ、相対的に「門人帳」も重視されることになったのである。